

直前東大現代文特講



【問題】

【二】 出典：黒崎政男『オプシヨンなき未来哲学 時代とともにありながら長いスパンをとりうる哲学』／オリジナル問題

ポイント

目まぐるしく変貌する現代社会について考察した文章の中には、多様なジャンルがあつて枚挙にいとまがないが、「メディア論」というジャンルをご存じだろうか。近代以降の科学技術の発達によって人間同士の様々なコミュニケーションが可能となり、新聞、雑誌、書籍、テレビ、パソコン、携帯電話などが人間社会における人と人との関係に大きな影響を与え、人間そのものに作用することを正面からとり上げたものである。東大でも過去に一定の割合でメディア論的な内容が出題されている。今回は「哲学」がポスト・モダン社会の中でどんな影響を受け、変貌しようとしているのかをとり上げてみた。過去の出題におけるメディア論的な内容とぜひ関連づけておいてほしい。

解答

- (一) 現代では思想も娯楽も均質に情報化され、哲学書の権威が認められないから、その著者の権威も希薄化するということ。
- (二) 一個人の深い思索が大量印刷されて公共物となり、その文献をめぐる多様な関わりが思索のさらなる深さを生む過程を経て。
- (三) 書物という媒体形式は、思索を練り上げるのに適し、平易な情報の即時処理を重視する時代風潮には受容されにくいから。
- (四) 主体としての人間という認識は近代思想の産物だから、近代が終わろうとする今、思考の中心に据えることはできないということ。
- (五) 現代では古典化された書物を前提とした著者の権威が情報化によって消失しつつあり、過去の哲学者の思想を軸に思索を営むことの意義も低下したが、長い年月を経て培われた深く思索するという哲学的洞察法自体は、現代的諸問題への対処にまだ最も有効だ

から。〔120字〕

- (六) a ≡ 熟読 b ≡ 書齋 c ≡ 暖炉（煖炉） d ≡ 検閲 e ≡ 覆

解説

(一) 傍線部Aの内容説明問題。東大の現代文では、内容説明問題であれ、理由説明問題であれ、文章の筆者の論理を読みとらねばならない。論理とは「前提」から「帰結」への正しい展開のことである。論理には必ず前提がある。そこを捉えることから始めよう。本文では、冒頭から「哲学を学ぶとは……テキストを熟読玩味することであった」（1～2行目）とはじめる。それを受けて、「し」と続け、「グーテンベルク印刷術というテクノロジーによってのみ」（3～4行目）と強調し、この文章がいわゆる「メディア論」に属することを示唆している。そして「すべての思想や娯楽が同様に（情報）として均一化され、いわばたれ流しされる今日の状況」（5～6行目）とくれば、まさにこの部分が筆者の論理の前提であることがわかるだろう。（一）はあくまで内容説明を求めているが、どのような論理から引き出された意見なのかがわかるように説明するために、理由を含む内容説明の形式で解答する。筆者が述べているのは『各種情報の扱われ方の変化』と『哲学書の著者の権威の失墜』との二点だが、『情報』と『著者』とを直結しては論理に飛躍をきたすので、この両者の媒介として『著者』によって『情報』が盛り込まれる『書物』を挙げる必要がある。

(二) 傍線部イは、書物が知的共同体の成立に寄与する経緯を説明する問題である。「このようにして」とある通り、傍線部の直前までの内容を、「知的共同体の成立」に絞って要約していくという方法でまとめる。本文にカントの『純粹理性批判』が例示されているが、書物とは「高度な集中力で、繰り返し時間をかけて黙読される」（9行目）テキストであり、「同一で不変のテキストという形で、見えざる大量の読者の書齋に、時と空間を超えて送り届けられる」（13～14行目）ことになる。これはもちろん活版印刷本というメディアなしにはありえないわけであるが、「個人の思想が紙とインクによって、時と空間を超えて固定され」「このことによって、初めて広範囲の知的共同体といったものの成立も可能となる」（17～18行目）とある通りである。直接には「例えば、ある一個人の個別的な考え（例えば、暖炉の前で一人思索にふけることによって、考え出された想い）が、同一大量テキストというメディアに託されることで、その考えは、ある公共性を得ることができる」（18～20行目）が手がかりとなり、傍線部の直前「異なった地域や時代の、

さまざまな書齋や図書館のうちで、さらに集中的な読みと解釈が加えられる」によって内容をまとめることが可能になるだろう。

- (三) 傍線部ウの理由を説明する問題。傍線部の理由を説明するためには、まず傍線部の趣旨を把握するのが手順である。ここは「書物というメディアが消滅しようとしている」という内容であり、容易に理解できよう。ではなぜ消滅しようとしているのか。現代は電子メディアの時代であり、「すべてがおしなべて〈情報〉である」(25行目)。流れ去るものとしての情報は平易であることを宿命とする。書物のもつ難解さは「ヒステリックなほどに排除」(26行目)されなければならない。書物という情報媒体形式は、こうした時代の要請に合わないゆえに消滅の危機に瀕していると筆者は言うのである。

- (四) 傍線部エの内容説明問題。一瞬どきりとさせられるような内容で、難解だという印象を受けるむきも多いかもしれない。ミッシェル・フーコーの著書からの引用なのだが、筆者の文章の論旨に合致する引かれかたであり、肯定的引用といえる。「〈人間〉という概念」とは何だろうか？ その直接的説明が見つけにくい場合も考え方はある。それがいつ生まれたか。ここでは「古典主義時代に続く近代という知の布置においてこそ、主体としての〈人間〉は成立した」(44行目)がヒントになる。「人間」という概念が近代に生まれたものであるならば、近代の終わりとともに消滅するはずであろう。この論理をもって、解答の枠組みを構築したい。近代とは時代区分のことではなく、時代意識のことである。近代という時代の意識が変化しようとしている現代を具体的に言い換えるなら、全てが情報化されようとしている現代ということになるだろう。「物体としての人間が消滅するわけではない」(46〜47行目)のは、もちろんである。しかし、神の時代、宗教の時代だった中世から近代へと移り変わったときに起きた変化——人間が、個人の理性が主役となるという意識の大変化——とは逆のことが、現代起こりつつあるということは「〈人間〉を軸に思考すること」(47行目) Ⅱ 「哲学〈者〉を軸に現代哲学を考えること」(48行目) が時代遅れになろうとしているということと同一なのである。

- (五) 本文全体の論旨を踏まえて傍線部オの理由を説明する問題。筆者は哲学者のようである(少なくとも哲学の今後について提言を行う資格を有する人物のようである)。本文の全体をふりかえってみると、筆者は従来の哲学のありかた(テキスト中心主義)が通用しない時代の到来を、やや悲観的に半ばあきらめとともに説明している。冒頭から哲学の拠り所としての書物について述べ、次いで書物の衰退とともに哲学者の権威が失墜する運命にあることに言及してきた。しかし、最終的には時代の変化の中で「哲学者」から

「哲学テーマ」時代への必然的な移行を確信するに至る、そういう本文の構成になっている。この構造把握にもとづいて本文の全体を要約するようにまとめてみる。

ポイント

東大現代文の傾向は、哲学的深みを感じさせる内容の文章や、詩的言語のもつ働きを追究する文章などがあって簡単に一括することは難しい。しかし肝要なのはとり上げられた「素材」よりも、それをいかに「説明」しているのかをよく読み取ることである。東大の国語では単なる「知識」ではなく「文脈把握力」が重視されることは間違いない事実なのである。

解答

(一) 俳句は短詩型なので、言葉の結びつきによって文脈が形成されるという通常の観点から見れば、全て不完全な表現となるということ。

(二) 俳句では、文脈上の切れ目から通常の文章による記述を超えた時空間を表現する可能性があるということ。

(三) 俳句では、一般的な切れ字を用いなくても、表現のあり方によって切れを表現しうること。

(四) 時間的・空間的な間である沈黙を作り出し、現実に起きている出来事とは違う次元の閑寂な境地を心中に浮び上がらせる働き。

解説

(一) 内容説明の問題。傍線部Aとは、「俳句の言葉は」どういうものなのかを端的に説明した文章である。比喩的に「みな破れていて、すき間だけである」というが、この比喩表現を用いることなく、客観的でわかりやすい「説明」を求めている問題なのだ。説明文とは「○○とは」と、既知の情報を受けて書き出すものであるけれども、この場合「俳句の言葉は」の、「言葉」とは何をさしているのだろうか。単語や語句のことではない。傍線Aの直前をたどっていくと「仮にこれをまっとうな文章と比べてみれば」とあることから、「俳句の言葉は」の「言葉」とは「文章」をさしていることがわかる。俳句の言葉十七音を、まっとうな文章（＝散文）の文章と比較して考えるということなのである。そうすればどう見えるか。どういふことがいえるのか。「本来なら言葉が結び合っ

て生まれるはずの文脈というものがほとんど成り立たない」(1～2行目)ということとは、形式上の制約のために、全てが不完全な文章にならざるをえない、必然的に俳句は不完全な文章なのだという方向性で説明できるだろう。

- (二) 内容説明の問題。傍線部Ⅱでは俳句における「切れ」の役割を筆者がどのようなものとみているかが端的に表現されている。第二段落には「俳句がもって生まれたこの破れをいわば逆手にとって、破れからのぞくすき間に広大な空間や悠久の時間と呼びこもうとした。」(5～6行目)とあり、切れ目から見える「はるかな時空」が表現されている。第三段落には「切れは十七音という制約を、発想を逆転させることによって自在な時空への入口に変えた。」(8行目)とあって、「小さな入口」という比喩を具体的に説明している。この「はるかな」・「小さな」に対応するような表現を工夫して内容説明をしてほしい。また、傍線部Ⅱを含む段落では俳句に関わる人々が俳句に対して感じる魅力の秘密が明かされている。俳句という極小の詩の世界に入り込み、楽しみの虜(とりこ)になっしまった人々にとって「切れというはるかな時空への小さな入口が開いている」(傍線部Ⅱ)と見えるのである。この点を内容説明に盛り込む必要がある。

- (三) 内容説明の問題。傍線部Ⅲは「どんな字でも」がポイントの一つ。普通、切れ字といえば「や」「かな」「けり」がその代表であるが、「明らかな切れ字だけではなく」(31行目)とあることをふまえて、「どんな字でも」が指す内容を正しくつかむ。それは、芭蕉が高弟の去来(きょらい)と丈草(じやうそう)に教えたことの中に含まれている。端的にいえば「入れずして切るる句」(29～30行目)がヒント。「どんな字でも」とは、「切れ字を用いなくても」の意である。飯田龍太の句「一月の川 一月の谷の中」の解説(35～36行目)からもそのことはつかめる。また傍線部Ⅲ「切れ字となる可能性」とは、「すべての言葉は使い方次第で切れたり切れなかったりする」(39～40行目)と照応しており、説明の言葉に窮することはまずないであろう。

- (四) 内容説明の問題。傍線Ⅳの「これ」が指すのは「古池や蛙(かわず)飛びこむ水の音」という有名な芭蕉の句の一般的解釈であり、通俗的で肝心の「や」の働きを見落としているというのである。痛烈な批判といってよい。筆者は続けて、切れ字「や」の働きを芭蕉の句に即して説明している。形式段落で最終段落に相当する部分をよく読んでみればわかるだろう。切れ字とは切るためにあり、句の切れとは、現実の世界と、全く別の世界(閑寂な境地)とを分ける(鋭く峻別するといってもいいだろう)働きのため以外にはない。

ここで石田波郷はきょうの句「霜柱俳句は切字響きけり」の解説(51～54行目)を読んで、句を切ることによって生み出される「間」や「沈黙」ということばを想起してもらいたい。切れ字の働きを説明するために不可欠といっている言葉である。通常のことば、文章には文脈というものがあつた。(設問(一)参照)しかし、俳句はその極めて短い文章中にあえて「間」「沈黙」を設けるのである。



会員番号	
------	--

氏 名	
-----	--